

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 28 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02620

研究課題名（和文）Wh要素と疑問標識の相互作用の研究

研究課題名（英文）On the interaction of wh-elements and interrogative markers

研究代表者

伊藤 さとみ（ITO, Satomi）

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：60347127

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、疑問標識と発話行為力を有する形態素の相互作用を考察した。具体的には、Groenendijk and Stockhof 1989の提案による分割意味論の枠組みを踏まえ、中国語の疑問文文末に現れる助詞とプロソディを分析した。分割意味論の枠組みでは、疑問文の意味は、話し手と聞き手が共有する知識状態を表現する可能世界集合の分割である。本研究では、中国語の文末助詞“ne”と“ma”は、可能世界集合を分割しないため、典型的な疑問標識とは言えないこと、プロソディが疑問文形成に寄与する程度は、英語ほど高くないことを明らかにし、プロソディを疑問標識と見なすことに対して再考の余地があることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

疑問文の意味は、形式意味論の分析において、一つの定義しか与えられていない。だが、実際の言語は、多種多様な疑問形式を有することが普通である。本研究では、中国語の疑問文について、形式、文末助詞の種類、プロソディなどの多方面から分析を行い、分割意味論が提案するようなコアな疑問文と、発話行為力のレベルで分析すべき疑問文があることを指摘して、その違いについて考察した。本研究の学術的意義は、疑問文の意味について新たな知見を開いた点にあり、社会的意義としては、疑問文という言語の必要不可欠な文型を理解することで、言語の本質の一端が明らかになった点にある。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the interaction of interrogative markers and morphemes that have illocutionary force. Specifically, I analyzed the functions of sentence-final particles and prosodic features in Mandarin Chinese on the basis of partition semantics proposed by Groenendijk and Stockhof 1989. In the framework of partition semantics, the meaning of an interrogative sentence is a partition on the set of possible worlds that consist the common ground shared by the speaker and the hearer. I indicated that sentence-final particles ne and ma do not divide the set of possible worlds, thus are not typical interrogative markers. Also, I showed that prosodic features to mark interrogatives are less prominent in Mandarin Chinese than in English, thus indicating the need to reconsider the function of prosody in interrogative sentences.

研究分野：言語学

キーワード：意味論 統語論 束縛 wh要素 疑問文

1. 研究開始当初の背景

形式意味論は、陳述文の真理条件を対象に発展してきた論理学の流れを汲む。そのために、陳述文の分析は命題論理や述語論理をそのまま生かすことができたが、疑問文の扱いは新しく考案しなければならなかった。70年代に Hamblin(1973)や Karttunen(1977)らが疑問文の意味の定義を試み、疑問文の意味とはそれに対する可能な答えを表す命題の集合とみなされるようになった。命題はその命題が成立する可能世界の集合と定義され、可能世界意味論に基づく分割意味論の提案(Groenendijk and Stockhof 1989)や、可能な答えという概念を巡っての定義の厳密化(Krifka 2001)が進められたが、次第に疑問文を完全に真理条件意味論の改良で扱うことの限界が認識されるようになった。つまり、疑問文は、陳述文と異なり、常に対人関係機能や発話行為力を有しており、そういった機能や力を取り込んで疑問文を定義する必要性が生じてきた。

2. 研究の目的

本研究では、Groenendijk and Stockhof 1989 の提案した分割意味論 (Partition Semantics) に基づき、疑問文の意味は、共通基盤の分割、即ち、話し手と聞き手が共有する知識を表現する可能世界集合を可能な答えごとに分割したものであるという前提に立って、対人関係機能や発話行為力を有する標識と疑問標識の相互作用を明らかにすることを目的とする。疑問文を共通基盤の分割であるとする定義は、形式意味論では一般的である。しかし、wh 要素や yes/no 疑問標識のような一見して明らかな疑問標識と共起しながら、自身は疑問標識ではない形態素が、多くの言語で見られ、それらの形態素の意味は直感的な記述にとどまっていることが多い。そこで、本研究は、疑問文に現れながら疑問を直接表さない形態素と疑問標識との関係を明らかにし、それらの形態素の機能を明らかにすることを通じて、疑問文の意味論に寄与することを目的とする。

3. 研究の方法

研究の方法としては、以下の3つの段階に分かれる。1) 疑問文を形成する疑問標識の特定とそれらの意味の記述、2) 疑問標識以外で疑問文によく現れる形態素の絞り込み、3) 疑問標識とそれらの要素の相互作用の分析である。1) の段階においては、その形態素を取り去ると疑問文でなくなることから、当該形態素が疑問標識であると判断する。具体的には、Wh 要素や yes/no 疑問文を形成する助詞/構文などである。疑問文の意味の記述として、Hamblin Semantics、Partition Semantics、Inquisitive Semantics、または、疑問文を作る関数を想定するなど、疑問文の記述には、これまでいくつかの方法が提案されているが、実際の記述として、どの理論がより説明力があるかを検証する。2) の段階においては、疑問文の意味を強めるまたは弱めるという記述がなされている形態素が対象となる。これらの形態素は、対人関係機能を持つと思われることが多く、現れる文脈も必ずしも疑問文とは限らない。そこで、疑問文の意味を踏まえた上で、それらの形態素の機能をどのように記述することができるかを考察する。3) の段階においては、これら疑問文に何らかの対人関係機能や発話行為力を付加する形態素に、どのような定義を与えることができるかを検討する。

4. 研究成果

1年目は、疑問文の意味についての研究を進め、二種類の yes/no 疑問文および二種類の wh 疑問文を持つ中国語を調査し、疑問文は分割意味論で表されるような意味(以下、「論理の意味」と略す)と発話行為レベルの意味の二つのレベルがあることを明らかにした。具体的には、中国語の論理的レベルの yes/no 疑問文は、V-negation-V の形式(正反疑問文)で表され、発話行為レベルの yes/no 疑問文は、例外はあるものの、典型的には文末に“ma”という助詞を付加する形式(ma 疑問文)で表される。一方、wh 疑問文についても、論理的レベルの場合は無標で、発話行為レベルの意味を含む場合は、文末に助詞“ne”を付加して表される。このように、yes/no 疑問文と wh 疑問文の両方において、論理的レベルと発話行為レベルを区別する疑問文が確認された。また、論理的レベルの疑問文は焦点の副詞(“jiu(~だけ)”など)と共起することができないが、発話行為レベルの疑問文は共起できること、前者は、動詞句による返答が可能だが、後者はできないことなどの違いも確認された。なお、前者にかかる制約は、焦点を解釈する過程と疑問文を生成する過程が共に会話の共通基盤の分割という操作を含むためであると考えられるが、後者にこのような制約がないことは、共通基盤の分割という方法によらない発話行為的疑問文の分析が必要であることを示唆する(以上、Ito 2017 “Intervention effects in answerhood,” 『人文科学研究』第13巻、pp.13-25に発表)。

2年目は、中国語のwh疑問文文末にしばしば出現する助詞“ne”を中心に考察した。疑問文の意味については、疑問文の意味を共通基盤の分割と考える分割意味論の他に、疑問文中に命題から真理値への写像を行う演算子があると仮定する説明(Structured Meaning Account)もある(Krifka 2001)。本研究では、疑問標識についてのデータを整理した結果、中国語の助詞“ne”は、分割意味論を指示することが明らかになった。なぜなら、“ne”という助詞は、疑問文だけでなく、平叙文文末や、話題名詞句後に表れ、これらの文脈に共通して行う働きを持っていると考えられる。本研究では、“ne”の機能は、疑問文であれば、答えの候補を表す命題間の対比、平叙文であれば、共通基盤にある当該命題と相いれない命題との対比、話題名詞句であれば、共通基盤中の個体との対比というように、会話の共通基盤に分割がある場合に、その分割の間の対比を表す機能があることを明らかにした。このように、対比の概念と分割意味論を組み合わせることによって、“ne”の持つ極めて広い使用が説明されるのである(以上、伊藤 2018a「疑問文中の語気助詞“ne”の機能：疑問演算子か対照話題マーカーかをめぐって」、『中国言語文化論研究』第7号、pp.20-46に発表)。また、yes/no 疑問標識について考察を行い、共通基盤の分割を行う疑問文と行わない疑問文の区別が、“ne”との共起を決定することを示した。例えば、中国語の“ma”疑問文は発話行為上の疑問行為であり、共通基盤の分割は行わないため、ne と共起できない。この対比からも、“ne”の機能が共通基盤上の分割に伴う対比の働きであることが伺える(以上、伊藤 2018b「談話機能から見る中国語における文末助詞 ma と ne の比較」、『お茶の水女子大学中国文学会会報』第37号、pp.17-34に発表)。

3年目には、前年度の考察を踏まえ、中国語の文末助詞“ne”のふるまいが分割意味論を支持するものであることを示した。分割意味論では、一部の発話行為的な疑問文を除き、疑問文は共通基盤の分割で表されるが、文末助詞“ne”は、これらの疑問文の文末に現れることができる。一方で、“ne”は、対照話題(Contrastive Topic)をマークすることもある。対象話題は、QUD(Question under discussion)構造の中で、二つ以上の話題が比較対象となっていることから、QUDの分割であると考えられる。そこで、両者をまとめると、出現場所は異なるものの、“ne”の出現は共通基盤の分割を前提とし、それ自身は分割された部分間の対比を強調する働きをすることを明らかにした。(以上、Ito, S. 2018 “How is contrast marked?” Paper presented at IACL-26 at University of Wisconsin-Madison)

4年目には、疑問文に現れるプロソディの研究を行った。プロソディ、特にイントネーションは多くの言語で疑問標識の一つであるが、言語により、他の疑問標識との組み合わせで用いられ、任意であったりするため、疑問標識との同一視は難しい。本研究では、声調言語であるため、疑問標識としてのプロソディの使用が限定的な中国語について、プロソディと疑問素性の関係を分析した。分析の対象とした構文は、選択疑問文である。中国語では、選択疑問文は疑問素性を持つ接続詞で構成されるが、選択肢を含むyes/no疑問文は、疑問素性を持たない接続詞と文末の疑問助詞で構成される。従って、両者の違いは、接続詞及び文末は語彙が異なるため、プロソディを比較することはできない。一方、第1選択肢部分に関しては、同じ語彙であれば比較可能である。そこで、母国語話者8名から音声のデータをとり、第1選択肢部分のプロソディの比較を行った。結果として、ピッチの高さや変化幅、音節の長さにおいて、選択疑問文と選言疑問文はプロソディ上のパターンは同じであることが分かった。これは、英語の選択疑問文と選言疑問文が異なるプロソディ、即ち、前者は第一選択肢が上昇、文末が下降するプロソディを持ち、後者が文末の上昇するプロソディを持つことと対照的である。また、選択肢を含むyes/no疑問文は、それ自体容認度が低いことも明らかになったが、これは、声調言語であるために制限されたプロソディ特性と、疑問の焦点とが一致しないためであると指摘した。(以上、Ito, S. 2019 “Prosodic property in alternative questions” Paper presented at IACL-27 at Kobe City University of Foreign Studies、及び、Ito, S. 2020 “Prosodic influence on Chinese disjunctive questions” 『人文科学研究』第16号、pp.53-66.)

<参考文献>

- Hamblin, C. L. (1973). Questions in Montague English. *Foundations of Language*:10. pp.41-53.
- Karttunen, L. (1977). Syntax and semantics of questions. *Linguistics and Philosophy*:1. pp.3-44.
- Krifka, M. 2001 For a structured meaning account of questions and answers. In Vox Sapientiae, A. (ed.) *A Festschrift for Armin von Stechow*. pp.278-319.
- Groenendijk, J. and M. Stockhof 1989 Type-shifting rules and the semantics of interrogatives. In Chierchi, G. et al. (eds.) *Properties, Types and Meaning*. pp.21-68.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 ITO, Satomi	4. 巻 16
2. 論文標題 rosodic influence on Chinese disjunctive questions	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文科学研究	6. 最初と最後の頁 53-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 伊藤さとみ	4. 巻 7
2. 論文標題 疑問文中の語気助詞“ne”の機能：疑問演算子か対照話題マーカークをめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国言語文化論研究	6. 最初と最後の頁 20-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 伊藤さとみ	4. 巻 37
2. 論文標題 談話機能から見る中国語における文末助詞“ma”と“ne”の比較	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 お茶の水女子大学中国文学会会報	6. 最初と最後の頁 17-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Ito, Satomi	4. 巻 13
2. 論文標題 Intervention effects in answerhood	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人文科学研究	6. 最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 ITO, Satomi
2. 発表標題 How is contrast marked? : The case of ne in Mandarin Chinese
3. 学会等名 26th international association of Chinese linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤さとみ
2. 発表標題 疑問文中の語気助詞“ne”の機能：疑問演算子か対照話題マーカークをめぐって
3. 学会等名 大東文化大学中国言語文化学術シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤さとみ
2. 発表標題 談話機能から見る中国語における文末助詞“ma”と“ne”の比較
3. 学会等名 お茶の水女子大学中国文学会第36回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石井友美、伊藤さとみ
2. 発表標題 中国語の正反疑問文に見られる 干渉効果について
3. 学会等名 日本言語学会第152回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 ITO, Satomi
2. 発表標題 On the typology of yes/no question markers
3. 学会等名 Theoretical and linguistics at Keio
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 ITO, Satomi
2. 発表標題 Chinese Particle Questions and their answerhood
3. 学会等名 2016年度第2回「東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究」共同利用・共同研究課題研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 ITO, Satomi
2. 発表標題 Prosodic property in alternative questions
3. 学会等名 27th international association of Chinese linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考